

課題整理 1

概念整理 ー日本列島における神（カミ）・祭祀（マツリ）、環境と認知ー

笹生 衛 國學院大学教授

1. はじめに

人間は、超自然的な行為者「神・霊魂など」を感じ、儀礼を行う。これを宗教とすると、それは人間にとって如何なる意味を持つのか。この問いに対して、エドワード・B.タイラーが1871年に『原始文化』（タイラー、2019）でアニミズムを提唱して以来、多くの研究が現在まで続いており、その視点は人類学・社会学・民族学・宗教学と多岐にわたる。

これに対し、20世紀末期から21世紀にかけて、新たな宗教研究の視点が示された。人間の脳の認知機能に基づき、宗教（神・霊魂などの考え方、それへの信仰や儀礼など）を考える「宗教認知科学」である。宗教認知科学の特徴は、宗教に関する事象を、共通する基本的な人間の認知的傾向性に基づく複数の要素に分解し、その組み合わせで、多様な宗教事象を説明する点にあり、この手法は、人間に共通する認知的傾向性に基づくため、異なる地域や環境、時代における宗教現象を、広く比較検討する場合、論理的な検討が可能となる（ホワイ、2025）。

しかし、宗教認知科学が前提とする人間の認知的傾向性（cognitive predispositions）は、時代を通して、地域が異なっても不変なのかという疑問が提起されている。例えば、文化進化論の立場からジョセフ・ヘンリックは、キリスト教々義の一夫一婦制の婚姻形態が浸透し西ヨーロッパの古代的な氏族集団が解体、商業活動の活発化と識字層の拡大を経て、欧米の特異な心理「個人の権利・責任、普遍的な法の重視」が形成されたとする。特に識字層の拡大は、脳幹の発達を促し脳機能の拡張につながったと指摘する（ヘンリック、2023）。宗教認知科学が前提とする認知的傾向性は、主に現代の欧米における心理学実験の結果に基づく。それが特異な歴史的な背景により形成されたとすると、この認知的傾向性を、他

の地域や異なる時代、古代の日本列島にまで当てはめてよいのかという疑問は、当然に出てくる。

そこで、ここでは、古代の日本列島における超自然的な行為者「神（カミ）」・「霊魂（タマ）」観と関係する認知的傾向性について、文献資料と考古資料から検証し、その特徴と変遷について整理しておきたい。

2. 認知的傾向性と神・霊魂観

神・霊魂観の形成プロセス 20世紀末期から現在までの宗教認知科学研究の概要と課題については、最近、クレア・ホワイが丁寧にまとめている（ホワイ、2025）。この整理によると、カミ・霊魂観と関係する主な認知的傾向性については、以下の5つの要素をあげることができる。

- ①現象の行為者の能動的な探知と擬人化、②心の理論の適応、③最小限の反直観性への注意（予想とはやや異なった状態のものが注意を引き、意識に残りやすい）、④死後の意識の継続の信念・オフライン社会的推論（実際に対面していない人物でも姿などをイメージできる）、⑤集団内での向社会性の推進。

これらの基本的な認知的傾向性が基礎となって、人間が神・霊魂観を形成するプロセスは、図1のように整理できる。まず、人間の認知的傾向性と生活する環境・社会構造（自然環境・人間の集団規模・集団間のネットワークなど）の条件が相互に影響し、その条件に適応的な文脈（価値観・行動規範＝文化）が生み出される。その文脈が、再び人間の認知的傾向性と影響しあうことで、それぞれの環境・社会構造に適応的な超自然的な行為者（神・霊魂）観が生み出される。そして、その神・霊魂観は、繰り返し行われる儀礼行為により強化され、儀礼行為は不確

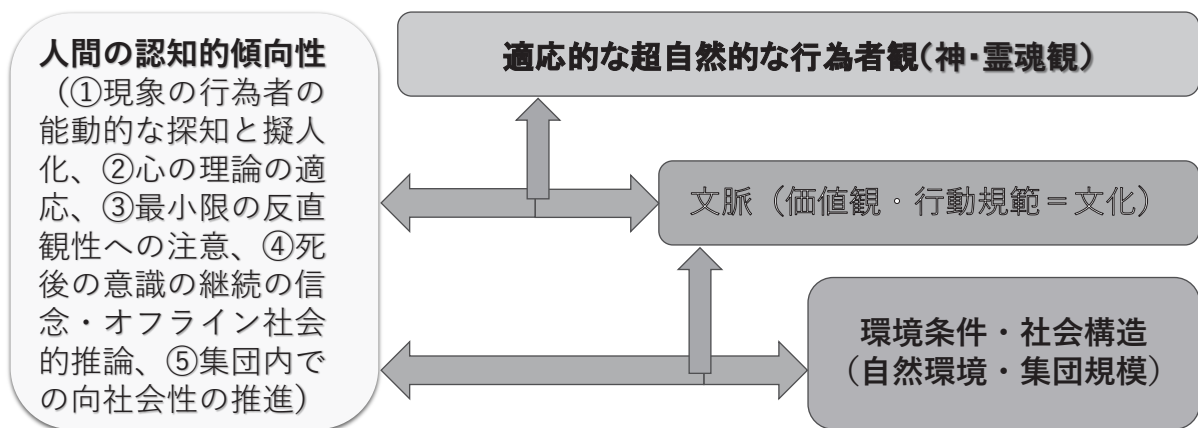


図1 超自然的な行為者観の形成構造

実な状況下にある人間の不安を低減させる、とも指摘されている(クシガラタス 2024)。

以上のように、各地域・時代ごとの神・靈魂観には、認知的傾向性にもとづく共通する要素と、環境・文脈が作用する異なる要素を包含する。このため自然環境や人間集団の規模、社会構造が異なる古代中国など他地域の神・靈魂観を、単純に古代の日本列島には適応できないのである。また、環境・社会構造が変化すれば、神・靈魂観も変化することになる。

認知的傾向性の検証方法 ここでの問題は、宗教認知科学の基本的な認知的傾向性が原始・古代の日本列島に当てはめてよいのかとの疑問である。これについては、文献資料と考古資料の両面からの検証が可能である。日本列島では、『古事記』(712年成立)、『日本書紀』(720年成立)、「古風土記」(8世紀前半に編纂)を始めとした古代のテキストが伝えられており、8世紀段階の神・靈魂観が具体的に記録されている。また、『皇太神宮儀式帳』(804年成立)からは古代の神宮祭祀の実態が確認でき、『延喜式』(927年成立)は古代の国家祭祀の捧げもの「幣帛」や祝詞の内容を記しており、当時の主要な神社がリストアップしている。

一方、列島内の各地では、神に対する儀礼「祭祀」

の痕跡「祭祀遺跡」が多数確認されており、4世紀後半から5世紀代には、東北地方から九州まで広範囲に分布する。その中には8・9世紀代の祭祀の場「神宮・神社」と重なる例は少なくない。さらに、5世紀代の祭祀遺跡の出土遺物からは、供献品の内容と祭祀の構成「祭式」が推定できる。それは「古風土記」や『延喜式』が記す「幣帛」に相当し、『皇太神宮儀式帳』が記す祭式の構成「Ⅰ祭祀の準備、Ⅱ祭祀の実施、Ⅲ祭祀後の対応」と一致する(笹生、2012・2016)。つまり、5世紀代の祭祀遺跡と8・9世紀の祭祀の場は連続するので、古代の文献資料が記す神観も5世紀頃まで遡及する可能性が高い。古代文献と祭祀遺跡の情報を総合することで、神・靈魂に関わる認知的傾向性の①・②・③について、古代の日本列島の状況の検証が可能となる。

また、日本では20世紀末期に大規模な土地造成に伴い大規模な発掘調査が実施され、原始・古代・中世にかけての集落・生産域・祭祀の場・墓域(古墳群など)の景観を復元できるデータが蓄積している。これと遺体の葬送方法を総合して分析することで、④に関わる死者・祖先観が検証でき、集落と墓域との関係からは、⑤と関係する氏族集団の検証が可能となる。

3. 古代日本における認知的傾向性と神（カミ）観の検証と変遷

行為者の探知と人格化 ここでは、古代の宗像・沖ノ島祭祀との関係で①「現象の行為者探知と擬人化」について、祭祀遺跡の立地環境と出土遺物から検証してみたい。5世紀以降の祭祀遺跡は、水源となる山の山麓、河川や灌漑用水路に面する場所、水陸交通上の要衝・難所、目標となる山や島嶼など、特徴的な地形・自然環境に立地する。いずれも、生産・生活と集団間のネットワークを維持する上で、特別な環境の働き（現象）が現れる場なので、その場（環境）の働き（現象）に行為者を探知・直観していたと推測できる。これは、「記紀」『延喜式』にある「～に坐す神（～に居られる神）・神社」の表現と整合する。それは、その場の現象に超自然的な行為者を探知して「カミ・神」と直観し、そこに「カミ・神」は居られると認識したので、そこが祭祀の場となったと整理できる。この典型例が、玄界灘の航海目標として重要な働きを現す宗像・沖ノ島（沖津宮）である。そこは「記紀」では女神が坐（居）す場所であり、4世紀後半まで遡及する祭祀の痕跡「祭祀遺跡」が残る。「記紀」が編纂された8世紀初頭には、現象の超自然的な行為者は、現象が現れる場所に「居られる」女神として、人格化していたことは間違いない。

カミ・神の人格化については、祭祀遺跡の出土遺物からも推測できる。日本列島内の5世紀代の祭祀遺跡では、ほぼ共通して土師器の高坏・坏・埴、須恵器の甕・高坏・坏・甕を中心に食器・酒器が出土する（第2図）。このため、当時の「マツリ・祭祀」では食膳による供献が不可欠であったと判断でき、祭祀対象のカミ・神は、人間と同じ食膳を所望し食べると認識されていたのである。こう考えると、古代の日本列島における「マツリ・祭祀」は、人間が超自然的な行為者「カミ・神」へ、意に沿った貴重な品々や食膳を捧げ、カミ・神は返礼として望ましい現象（働き）を維持し提供するという交換の儀礼として定義できる。そうすると、「意に沿う」という、カミ・神の心を推し量る②「心の理論」も、この段

階には適応できることになる。さらに、カミ・神の存在を示す地形と自然物として、円錐形で均整の取れた「神名備山」と巨岩の「磐座」がある。これは、特定の現象が起こす超自然的な行為者が居られる場と、③「最小限の反直観性への注意」を促す、周囲とは異なる美しい山や、巨岩の存在が重なった現象として説明できる（第3・4図）。

不安定な神の人格化 ただし、神の人格化は、全ての古代日本のカミ・神々には適応できない。例えば、「記紀」において、三輪山に坐す大物主神は、夜は貴人の姿で現れる一方で、昼は蛇の姿で現れた（第5図）。イワレヒコノミコトを苦しめた熊野の山の荒ぶる神は熊、ヤマトタケルノミコトと対峙した神坂峠の山の神は白い鹿、伊吹山の神は大蛇で、荒ぶる神々は熊・白鹿・大蛇として現れた。『常陸国風土記』行方郡条の夜刀の神は角を持つ蛇である（第6図）。「記紀」『古風土記』が編纂された8世紀前葉の段階でも、神の人格化は不安定な状態であった。これらの神々は、王権や人々に危害を加える威力をもち、その働きが危険な大型獣の熊、特異な姿の白鹿と蛇の表象へと結びついたのである。

カミ・マツリと国家の形成 日本列島で、古代のマツリ・祭祀が成立する大きな画期は、祭祀遺跡の状況から5世紀であったと考えられる。その時代の祭祀遺跡からは、共通する石製模造品や銅製儀鏡など祭祀用具とともに、鉄製の武器・武具、農・工具、鉄鋌（鉄素材）、初期須恵器といった、朝鮮半島から新たに伝わった先端技術を象徴する品々が出土し、供献品として捧げられていたと考えられる。これらの品々は、やはりヤマト王権から供与された可能性が高い。

これと関わるのが、5世紀代に明確になる「大王」という称号と、「天下」という国土の領域の意識だったと考えられる。日本列島では4世紀後半以降、中国王朝や朝鮮半島諸国との接触・交流が活発化し、5世紀になるとヤマト王権内で「治天下大王（天下を統治する大王）」の文脈が形成され、列島内では「人制」にもとづく集団間の組織化が進んだ（田中、2013）。そこでは大王を各種の役割で補佐する地方首長という構造が明確になる。特に5世紀中頃から

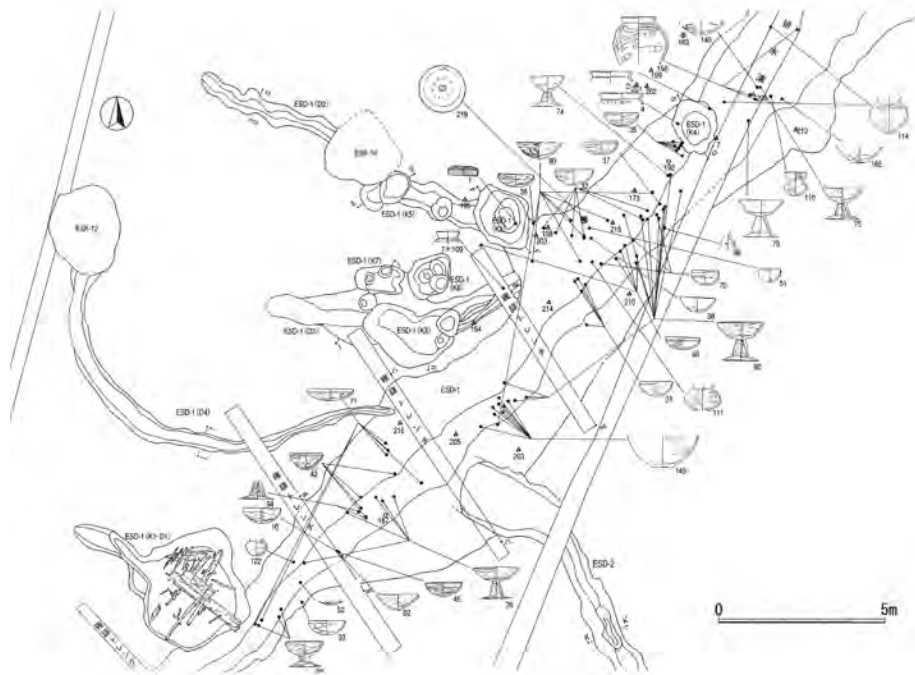


図2 千葉県長須賀条里制遺跡の5世紀の灌漑用水路と祭祀関係遺物の出土状況
 (高梨友子他編『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡』
 (財)千葉県文化財センター他、2004より)



図3 建鋒山と阿武隈川の支流 (笹生撮影)



図4 熊野山遠景 (笹生撮影)



図5 三輪山の遠景 (笹生撮影)



図6 『常陸国風土記』で夜刀神の伝承の舞台と
 考えられる谷津田の景観 (笹生撮影)

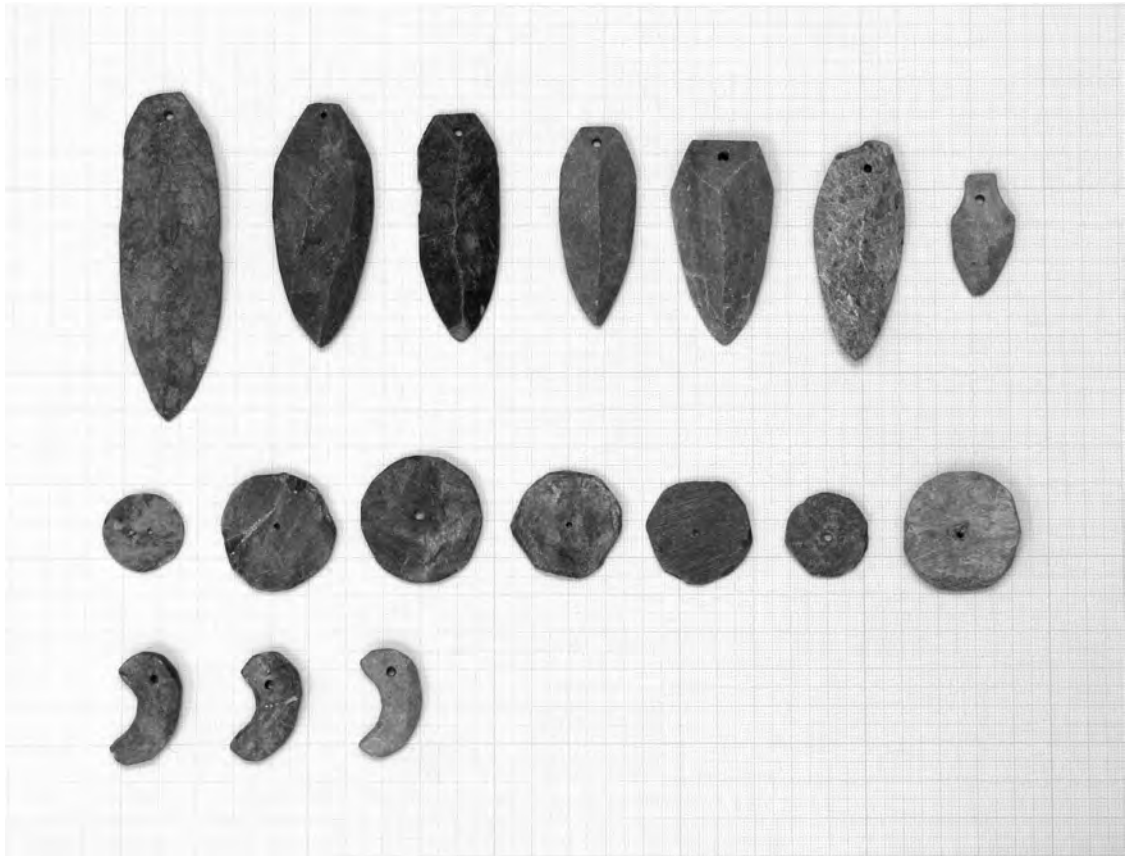


図7 茨城県宮中条里大船津地区出土の石製模造品（鹿嶋市どきどきセンター蔵、笹生撮影）



図8 茨城県厨台遺跡群出土の子持勾玉（鹿嶋市どきどきセンター蔵、笹生撮影）

後半にかけて列島内の広範囲に展開する祭祀遺跡は、このような大王と地方首長との新たな組織関係、またヤマト王権と中国・朝鮮半島とが密接に結びついた新たなネットワークに対応するものと考えられる（溝口、2023）。宗像・沖ノ島祭祀では、ヤマト王権と直結する初期のⅠ号巨岩周辺の祭祀遺跡（17・18・19号）から、5世紀中頃のⅡ号巨岩の祭祀遺跡（21号）への変遷が、この変化を示しており、同時に勝浦峯ノ畑古墳が築造され、津屋崎古墳群へと継承される、宗像の祭祀を司る首長の系譜が成立する。

ここに、大王が統治する天下の領域内で、交通・生産などで重要な現象が起こる環境に超自然的な行為者「カミ・神」を直観し、各地の首長がヤマト王権から供献品の供与を受け、各地域の神々を祀るという祭祀の体制が成立したと考えられる。この後、宗像・沖ノ島祭祀は、7世紀後半、ヤマト王権が律令国家へと移行する過程で、神宮や出雲、香島（第7・8図）・香取などと同様に神郡が設置され、恒例の国家祭祀としての体制を整えた。これは、同時に編纂・テキスト化が進められた「記紀」神話の内容に対応した形で行われたのである（笹生、2016）。

東アジアの交易圏とビッグゴッド 東アジアでは9世紀中頃を画期として、中国の民間海商（商人）の活動が活発化し（鈴木他編、2017）、10世紀から12世紀にかけて、日本列島と周縁部は北宋を中心とした東アジアの広域交易ネットワークに組み込まれた。さらに、9世紀後半から10世紀にかけての気候変動に伴う環境変化、特に河川や海浜の変化による灌漑用水系や港湾環境の変化を受けて、氏族（血縁）集団の集合体である古代集落と地域社会は解体し、12世紀までに中世的な集落やネットワークが成立、これに適応的な神・靈魂観が形成された。それが、日本列島のローカルな神々が世界宗教の仏教との間で形成した新たな神観である（笹生、2023A）。

「記紀」の宗像三女神は、日本列島と大陸・半島とを結ぶ海上交通で、航海目標や港湾機能として重要な働きを示す、沖ノ島（沖津宮）・大島（中津宮）・釣川河口のラグーン（辺津宮）に坐（居）す神とされた。しかし、三女神は、10世紀に仏教の大菩薩位を望む託宣を下し、古代以来の祭祀は仏教法会へと

変更される（『類聚符宣抄』第1、天元2年2月14日、宗像大宮司補任官符）。そして、12世紀には宗像三女神は、第一・二・三大菩薩として、釣川河口の辺津宮で一括して祀られ、そこは大宮司が掌る宗像信仰の中核となっていく。これに対応して成立したのが、宗像の西、津屋崎の汐入干潟に面し日宋貿易の拠点となった唐坊（在自西ノ後遺跡）であり、ここを拠点として、宗像大宮司は中国との貿易・交易へと積極的に関わった。

ほぼ同時期の11世紀末期から12世紀、福井県の敦賀には北宋商人が来航していた。そこと平安京を結ぶ、琵琶湖北端の塩津港遺跡の神社遺構からは、保延3年（1137）の起請文木札が出土した。この起請文には、仏教の天部である梵天・帝釈天・四天王とともに、八幡大菩薩・賀茂上下・山王七社など日本の神祇が誓約の対象として勧請され、この札を立てた草部行元が請け負う荷の魚を一巻でも取り流したら天部・神々の罰を受けるとある。天部と神祇は、草部行元が請け負った仕事の監視者で、まさにアラ・ノレンザヤンが指摘する、超自然的な監視者「ビッグゴッド」に対応する（笹生、2023B）。ノレンザヤンは、「超自然的監視者（ビッグゴッド）」から「監視されていると深く信じる者であれば、見知らぬ人であろうともそのネットワークに参加するよう勧めやすく、またより信頼する」としており（ノレンザヤン、2022）、文化・地域が異なる人々が広域の交易圏に加わるうえで、世界宗教と習合してビッグゴッド化することは重要な意味を持っていた。宗像の三女神の仏教化も、この文脈の中で理解できるだろう。

4. まとめ ーカミ・神観の段階的な変遷と人格化の進化ー

日本列島の古代の「カミ・神」観は5世紀と10世紀頃の集団の変質と新たなネットワークの形成に適応した新たな文脈にもとづき段階的に変遷していた。

カミ・神に係る認知的傾向性の中で、①「現象の行為者の能動的な探知と擬人化」は、日本列島で大王による天下統治の文脈が形成された5世紀には確認できる。ただし、「記紀」が編纂された8世紀初頭

においては、全ての神々が完全に人格化していたわけではなかった。

7世紀後半、律令国家による「記紀」編纂に伴い、大王（天皇）との関係のなかで神々への信仰が語られテキスト化し、これに併せて祭祀制度と祭祀の場が整備された。特に650年代から660年代、神宮・香島神宮・出雲における大王の居所「宮」に倣った「神の宮」の造営、そこでの宮廷儀礼に合わせた「祭祀」儀礼の実施（笹生、2016）は、それまで以上に人の姿をした神をイメージさせ人格化を確実に形としたはずである。さらに、神護景雲2年（768）に成立した春日祭祀詞では、それまで「幣帛」としていた捧げ物を、神が所有する「神宝」と、神が身に纏う美しい布の「御服」に分類しており、神の人間としてのイメージが明確となり、この分類は『皇太神宮儀式帳』の「神財・宝物等」と「装束」へとつながる（笹生、2013）。また、『皇太神宮儀式帳』には、月読宮の月読命の御形（神を表象する物）について「馬に乗る男の形。紫の御衣をき、金作の帯大刀佩きたまう」とあり、馬に乗る男神像である。神宝には金作大刀二柄と青毛土馬一疋が含まれ、神像の姿と一致する。神像の成立は、仏像との関係で語られることが多い。しかし、この時点で月読宮には明確な仏教の影響は認められない。このため、月読宮の月読命の神像が成立した背景には、8世紀代の神の人格化の進化が影響していた可能性が考えられる。

9世紀までに日本の神々の人格化が一段と進んだことは、次の画期、10世紀から12世紀にかけて、新たな文脈（古代的な氏族集団の解体・広域ネットワークへの参入）に適応的な神格の変化を準備し、世界宗教の仏教の仏・菩薩、天部と日本の神々との一体化を容易にしたのだろう。

参考文献

- クシガラタス、ディミトリアス（田中恵理訳）
『RITUAL 人類を幸福に導く「最古の科学」』晶文社、2024。
笹生 衛『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館、2012。
笹生 衛「神宝の成立—組成の意味と背景—」『明治聖徳記念学会紀要』復刻第50号、明治聖徳記念

学会、2013。

笹生 衛『神と死者の考古学 古代のまつりと信仰』吉川弘文館、2016。

笹生 衛『まつりと神々の古代』吉川弘文館、2023A。

笹生 衛「古代交通路と祭祀の景観—祭祀・祭具の意味と古代末期の変化を中心に—」佐々木虔一・笹生 衛・菊地照夫編『古代の交通と神々の景観—港・坂・道—』八木書店、2023B。

鈴木靖民・金子修一・田中史生・李成市編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017。

タイラー、エドワード・B（松村一雄監修、奥山倫明＋奥山史亮＋長谷千代子＋堀雅彦訳）『原始文化〈上・下〉』国書刊行会、2019。

田中史生「倭五王と列島支配」『岩波講座 日本歴史 第1巻◆原始・古代1』岩波書店、2013。

ノレンザヤン、アラ（藤井修平・松島公望・荒川 歩訳）『ビッグ・ゴッド 変容する宗教と協力・対立の心理学』誠信書房、2022。

ヘンリック、ジョセフ（今西康子訳）『WEIRD「現代人」の奇妙な心理 経済的繁栄、民主制、個人主義の起源 上・下』白揚社、2023。

ホワイト、クレア（藤井修平、石井辰典、中分遥、柿沼舞花、佐藤浩輔、須山巨基訳）『宗教認知科学入門—進化・脳・認知・文化をつなぐ』勁草書房、2025。

溝口孝司「沖ノ島祭祀の機能と変容：古代東アジアの航海・交流における祭祀・信仰へのアプローチの観点から」『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業 成果報告書』「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会、2023。

Conceptual Framework

Kami (Deities) and Saishi (Rituals) in the Japanese Archipelago: Interpreting Through Environment and Cognition

SASOU Mamoru Professor, Kokugakuin University, Museum Kokugakuin University

1. Introduction

Human beings perceive supernatural agents as “gods and spirits”, and perform rituals. If we define this practice as religion, what meaning does it hold for humanity? Since Edward B. Tylor proposed animism in his 1871 work *Primitive Culture* (Tylor, 1920) in response to this question, numerous studies have continued through to the present day, encompassing diverse perspectives including anthropology, sociology, ethnology, and religious studies.

In contrast, from the late 20th century into the 21st century, a new perspective on religious research was set forth. This is the “cognitive science of religion,” which examines religion (concepts of gods and spirits, faith in such beings, and rituals, etc.) based on the cognitive functions of the human brain. The distinctive feature of cognitive science of religion lies in its method of breaking down religion-related phenomena into multiple elements based on fundamental cognitive predispositions common to all humans, and explaining diverse religious phenomena through combinations of these various elements. As this approach is based on cognitive predispositions universal to humans, it enables logical examination when comparing religious phenomena across different regions, environments, and time periods (White, 2021).

However, questions have been raised about whether the cognitive predispositions assumed by the cognitive science of religion remain constant across time periods and regions. For example, from the perspective of cultural evolution theory, Joseph Henrich argues that the penetration of Christian monogamous marriage practices caused the undoing of ancient clan groups in Western Europe, and through the expansion of commercial activity and literacy,

the distinctive Western psychology of “individual rights and responsibilities, and the primacy of universal laws” was formed. In particular, he points out that the expansion of literacy promoted brain development and led to the enhancement of brain functions (Henrich, 2020). The cognitive predispositions assumed by the cognitive science of religion are primarily based on results from psychological experiments conducted in contemporary Western societies. If these were formed through such distinctive historical circumstances, the natural question arises: can these cognitive predispositions be applied to other regions, different time periods, or the ancient Japanese archipelago?

This paper therefore seeks to examine the cognitive predispositions related to concepts of supernatural agents—“*kami* (deities)” and “*tama* (spirits)” —in ancient Japan through documentary and archaeological sources, and clarify their characteristics and historical transitions.

2. Cognitive Predispositions and Concepts of Deities and Spirits

Formative process of concepts of deities and spirits

Claire White has recently provided a carefully detailed summary of the overview and challenges of cognitive science of religion-related research from the late 20th century to the present (White, 2021). According to her synthesis, five main cognitive predispositions can be identified as being related to concepts of deities and spirits:

- 1) Active agency detection and anthropomorphization of phenomena; 2) Application of Theory of Mind; 3) Attention to minimal counterintuitiveness (things slightly different from expectations attract attention

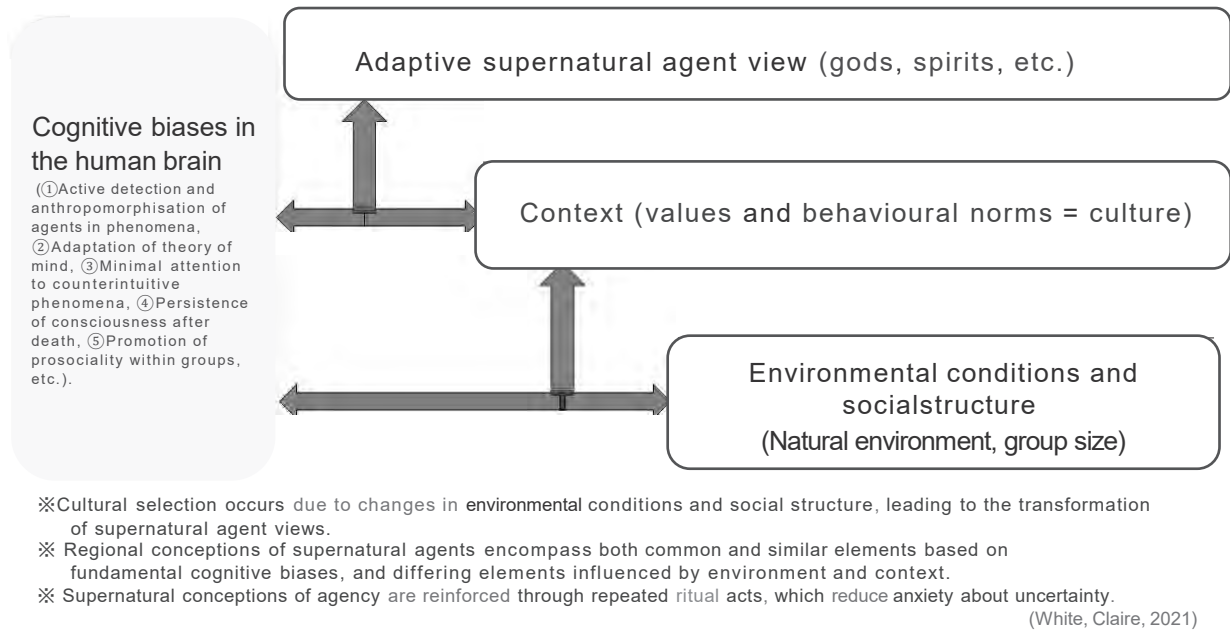


Figure 1: Structural formation of supernatural agent views

and remain in consciousness more easily); 4) Belief in persistence of consciousness after death, and offline social reasoning (the ability to imagine the appearance of people not physically present); and 5) Promotion of in-group prosociality.

The process by which humans form concepts of deities and spirits based on these fundamental cognitive predispositions can be organized as shown in Figure 1. Firstly, human cognitive predispositions interact with the conditions of the living environment and social structures (natural environment, size of human groups, networks between groups, etc.), producing adaptive contexts (values and behavioral norms = culture) for those conditions. Through the interaction of these contexts with human cognitive predispositions, concepts of supernatural agents (deities and spirits) adaptive to each environment and social structure are generated. These concepts of deities and spirits are then reinforced through repeated ritual acts, and it has also been noted that such ritual acts reduce the anxiety of humans in uncertain situations (Xygalatas, 2022).

As described above, concepts of deities and spirits in each region and era contain both common elements based on cognitive predispositions and distinct elements

influenced by environment and context. Therefore, concepts of deities and spirits from other regions such as ancient China, where the natural environment, scale of human groups, and social structure all differ, cannot simply be applied to ancient Japan. Moreover, as environment and social structure change, concepts of gods and spirits also change.

Methods for verifying cognitive predispositions

The question here is whether the fundamental cognitive predispositions of the cognitive science of religion can be applied to ancient Japan. This can be verified from both documentary and archaeological sources. In Japan, ancient texts have been transmitted, including the *Kojiki* (compiled in 712), *Nihon Shoki* (compiled in 720), and *Old-Fudoki* (compiled in the early 8th century), which specifically record concepts of *kami* and *tama* from the 8th century. Furthermore, from the *Kōtai Jingū Gishikichō* (compiled in 804), the actual state of ancient shrine rituals can be confirmed, and the *Engishiki* (compiled in 927) records the contents of offerings (*heihaku*) and ritual prayers (*norito*) in ancient state rituals, listing the major shrines of the time.

At the same time, throughout the Japanese archipelago numerous traces of rituals (*saishi*) performed for *kami*,

referred to as ritual sites, have been confirmed, distributed widely from the Tohoku region to Kyushu from the late 4th to 5th centuries. Many of these overlap with 8th and 9th century ritual sites identified as “shrines.” Furthermore, from artifacts excavated from 5th century ritual sites, the contents of offerings and the structure of rituals can be hypothesized. These correspond to the *heihaku* recorded in the *Old-Fudoki* and *Engishiki*, and correspond to the ritual structure recorded in the *Kōtai Jingū Gishikichō*, namely “1) Preparation stage of ritual, 2) performance of ritual and 3) Handling at the conclusion of ritual” (Saso, 2012, 2016). In other words, since 5th century ritual sites maintain continuity with 8th and 9th century ritual sites, the concepts of *kami* recorded in ancient documentary sources likely extend back to around the 5th century. By synthesizing information from ancient documents and ritual sites, it becomes possible to verify the abovementioned cognitive predispositions 1), 2) and 3) related to *kami* and *tama* in ancient Japan.

Additionally, in Japan, large-scale excavations accompanying major land development in the late 20th century resulted in the accumulation of data enabling the reconstruction of landscapes including settlements, production areas, ritual sites, and burial areas (such as ancient tomb groups) spanning from ancient to medieval times. By analyzing this data in combination with burial methods, concepts of the deceased and ancestors related to cognitive predisposition 4) can be verified, and from the relationship between settlements and burial areas, clan groups related to 5) can also be examined.

3. Verification and Historical Transitions of Cognitive Predispositions and Concepts of *Kami* in Ancient Japan

Detection of agent and their personification

Here, let us verify 1) “agency detection and anthropomorphization of phenomena” in relation to the ancient Munakata-Okinoshima rituals, based on the location environment and excavated artifacts of ritual sites. Ritual

sites from the 5th century onward are located in characteristic topographical and natural environments: mountain foothills that are also water sources, places facing rivers or irrigation channels, key points and dangerous spots in water and land transportation, and prominent mountains or islands serving as landmarks. Since all these are places where special environmental functions (phenomena) appear that are important for maintaining production, livelihoods, and networks between groups, it can be inferred that supernatural agents were detected and intuited in the functions (phenomena) of those places (environments). This is consistent with the expression found in the *Kojiki*, *Nihon Shoki*, and *Engishiki*, which stated “*kami* residing at...,” or “shrine at...” This can be organized as follows: supernatural agents were detected in the phenomena of those places and intuitively recognized as *kami*/deities and because *kami*/deities were recognized as residing there, those places became ritual sites. A typical example of this is Munakata-Okinoshima (Okitsu-miya), which served the important function of being a navigation landmark in the Genkai Sea. According to the *Kojiki* and *Nihon Shoki*, this is a place where a female deity resides, and traces of rituals (ritual sites) remain that date back to the late 4th century. There is no doubt that by the early 8th century when the *Kojiki* and *Nihon Shoki* were compiled, the supernatural agents of phenomena had been personified as female deities “residing” in the places where phenomena appeared.

The personification of *kami* can also be inferred from artifacts excavated from ritual sites. At 5th century ritual sites throughout the Japanese archipelago, tableware and sake vessels are commonly excavated, centering on Haji pottery *takatsuki* (pedestaled dishes), cups, and jars, and Sue ware jars, pedestaled dishes, cups, and bottles (Fig.2). Therefore, it can be determined that food offerings were indispensable in the *matsuri* (rituals) of that time, and the *kami* being worshipped were recognized as desiring and consuming the same food as humans. In view of this, *matsuri* in ancient Japan could be defined as having been exchange rituals in which humans offered precious goods and food that pleased the supernatural agents, or *kami*, and in return, the *kami*



Figure 2: Excavation Situation of the 5th Century Irrigation Canal and Ritual Artifacts at the Nagasuka Jorisei Site, Chiba Prefecture (Provided by Chiba Prefecture Social Education Foundation Cultural Properties Center)

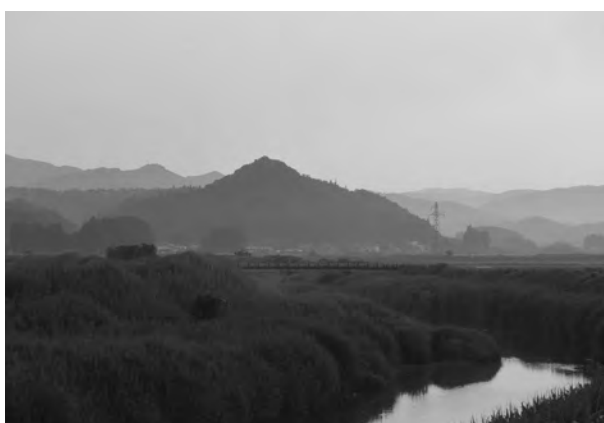


Figure 3: Tatehoko Mountain and tributary of the Abukuma River (Photo by Saso)



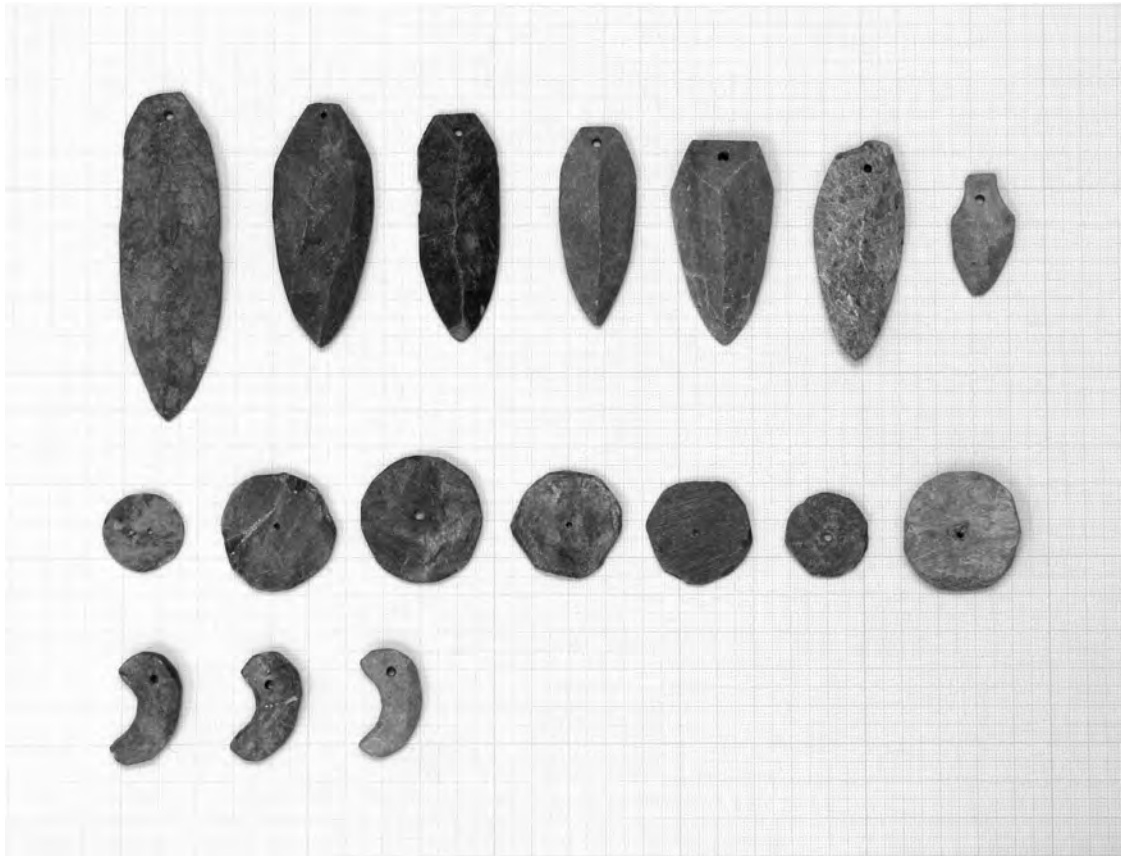
Figure 4: Distant view of Kumano Mountain (Photo by Saso)



Figure 5: Distant View of Miwa Mountain (Photo by Saso)



Figure 6: Landscape of Yatsuda, considered the setting for the Yato no Kami legend in the Hitachi no Kuni Fudoki (Photo by Saso)



*Figure 7: Steatite Ritual Objects Excavated from the Ofunatsu Area, Miyanaka Jori, Ibaraki Prefecture
(Collection of Kashima City Dokidoki Center, Photograph by Saso)*



*Figure 8: Comma-Shaped Beads with Smaller Beads Excavated from the Kuriyadai Sites, Ibaraki Prefecture
(Collection of Kashima City Dokidoki Center, Photo by Saso)*

maintained and provided desirable phenomena (functions). This means that 2) “Theory of Mind,” or inferring the intentions of *kami* to understand what would “please” them—can also be applied at this stage. Furthermore, there are cone-shaped, well-proportioned “sacred mountains” (*kannabi-yama*) and giant rocks (*iwakura*) that indicate the presence of *kami* as topographical and natural features. This can be explained as a phenomenon where the place where supernatural agents causing specific phenomena reside overlaps with the presence of beautiful mountains or giant rocks that differ from their surroundings, thus prompting 3) “attention to minimal counterintuitiveness. (Fig.3·4)”

Unevenness in personification of kami

However, personification cannot be applied to all *kami* in ancient Japan. For example, in the *Kojiki* and *Nihon Shoki*, the deity Omononushi-no-kami, residing at Mount Miwa appeared in the form of a nobleman at night but appeared as a serpent during the day (Fig.5). The fierce *kami* of the Kumano mountains who tormented Iwarehiko-no-mikoto was a bear, the mountain *kami* of Misaka Pass who confronted Yamato Takeru-no-mikoto was a white stag, and the *kami* of Mount Ibuki was a giant serpent. These fierce *kami* appeared as bears, white stags, and giant serpents. The Yato-no-kami in the Namegata section of the *Hitachi no Kuni Fudoki* is a serpent with horns (Fig.6). Even in the early 8th century when the *Kojiki*, *Nihon Shoki*, and *Old-Fudoki* were compiled, there was unevenness in the personification of *kami*. These *kami* possessed power to harm the royal authority and people, and their dangerous functions likely became linked to representations of dangerous large beasts like bears, and the distinctive forms of white stags and serpents.

Kami, matsuri, and state formation

Judging from the state of ritual sites, the major turning point when ancient *matsuri*/rituals were established in the Japanese archipelago is considered to have been in the 5th century. From ritual sites of this period, alongside common ritual implements such as stone replica items and bronze

ceremonial mirrors, iron weapons and armor, agricultural and craft tools, iron ingots (raw iron materials), and early Sue ware, all of which were items symbolizing cutting-edge technology newly transmitted from the Korean Peninsula, have been excavated and are thought to have been offered as votive items. These items were likely presented for dedication by the Yamato royal authority.

Related to this is the title “Great King” (*Ōkimi*) and consciousness pertaining to the territorial domain called “*Tenka*” (All Under Heaven), which became clear in the 5th century. In the Japanese archipelago, from the late 4th century onward, contact and exchange with Chinese dynasties and Korean Peninsula states intensified, and by the 5th century, the context of a “Great King Ruling All Under Heaven” was formed within the Yamato royal authority, and organization between groups based on “human systems” (*jinsen*) advanced within the archipelago (Tanaka, 2013). Here, a structure became clear with the Great King supported by regional chiefs in various roles. The ritual sites that spread widely throughout the archipelago particularly from the mid to late 5th century are thought to correspond to these new organizational relationships between the Great King and regional chiefs, and to the new network closely connecting the Yamato royal authority with China and the Korean Peninsula (Mizoguchi, 2023). In the Munakata-Okinoshima rituals, the transition from early ritual sites (Sites 17, 18, 19) around the Great Rock I area directly connected to the Yamato royal authority to the ritual site at Great Rock F from the mid-5th century (Site 21) demonstrates this change. Concurrently, the Katsuura Minenohata Tomb was constructed and succeeded by the Tsuyazaki mounded tomb group, thus establishing a lineage of chiefs who presided over Munakata’s ritual traditions.

Here, a ritual system was established in which supernatural agents, or *kami*, were intuited in environments where important phenomena for transportation and production occurred within the domain under heaven ruled by the Great King, and regional chiefs throughout the land, receiving offerings provided by the Yamato royal authority,

worshipped the *kami* of each region. Subsequently, in the late 7th century, during the process of the Yamato royal authority's transition to the Ritsuryo state, the locations for Munakata-Okinoshima rituals were designated as sacred districts (*shingun*), like those at Ise Grand Shrine, Izumo, Kashima (Fig7·8), and Katori, etc., and were organized as regular state rituals. This was carried out in a form corresponding to the descriptions set out in the *Kojiki* and *Nihon Shoki*, which were contemporaneously being compiled and textualized (Saso, 2016).

East Asian trade networks and big gods

In East Asia, the mid-9th century became a turning point when the activities of Chinese private maritime merchants became more vigorous (Suzuki et al. eds., 2017), and from the 10th to 12th centuries, the Japanese archipelago and its peripheral regions were incorporated into the wide-area trade network centered around Northern Song China. Furthermore, environmental changes occurred accompanying climate change from the late 9th to 10th centuries, particularly changes in rivers and coastal areas that affected irrigation systems and port environments. These changes led to the breakdown of settlements and regional societies that were aggregates of clan (kinship) groups, and by the 12th century, medieval settlements and networks were established, forming concepts of *kami* and *tama* in ways that adapted to the changed environmental reality. This was a new concept of *kami* formed between the local *kami* of the Japanese archipelago and the global faith of Buddhism (Saso, 2023A).

The Three Female Deities of Munakata in the *Kojiki* and *Nihon Shoki* were gods residing at Okinoshima (Okitsu-miya), Oshima (Nakatsu-miya), and the lagoon at the Tsurikawa River mouth (Hetsu-miya), which served important functions as navigation landmarks and harbors in maritime transportation connecting the Japanese archipelago with the continental and peninsular Asia. However, in the 10th century, the Three Female Deities of Munakata made a divine revelation indicating their wish to receive the Buddhist rank of “Great Bodhisattva,” with the

result that rituals that had continued since ancient times were changed to become Buddhist ceremonies (*Ruijū Fusenshō*, Volume 1; February 14, Second year of Tengen; Munakata *Daiguji* (High Priest) Appointment Official Document). By the 12th century, the Three Female Deities of Munakata were worshipped collectively at Hetsu-miya at the Tsurikawa River mouth as the First, Second, and Third Great Bodhisattvas, which became the core of Munakata faith under the high priest's control. Corresponding to this was the establishment of *Tōbō* (Araji-Nishi-no-ato Site) west of Munakata, facing the tidal flat at Tsuyazaki, which became a base for Japan-Song trade, and the Munakata high priests actively engaged in trade with China from this base.

At almost the same time, from the late 11th to 12th centuries, Northern Song merchants were arriving at Tsuruga in Fukui Prefecture. From the Shiotsuko Site at the northern end of Lake Biwa, which connected through to the capital Heian-kyo, a wooden oath tablet dated the third year of Hoen (1137) was excavated from the remains of a shrine. This oath invoked not only Buddhist devas (heavenly beings) such as Bonten (Brahma), Taishakuten (Sakra), and the Four Heavenly Kings, but also Japanese deities including Hachiman Daibosatsu and Kamo Upper and Lower Shrines and Sanno Seven Shrines as objects of the oath tablet, stating that if Kusabe Yukimoto, who erected the tablet, diverted even one bale of fish he was contracted to transport, he would receive punishment from the heavenly beings and *kami*. The heavenly beings and *kami* were thus supernatural monitors of the work Kusabe Yukimoto had been contracted to undertake, corresponding to the “big gods” identified as supernatural monitors by Ara Norenzayan (Saso, 2023B). Norenzayan (2013) argues that belief in a “supernatural monitor” or “big god”—that is, a deep conviction of being watched by a higher power—makes individuals more inclined to invite even strangers into their social networks and to place greater trust in them (“Strangers who showed sincere belief in being monitored were, therefore, more likely to be invited to join these networks and were trusted more”). In

this context, the syncretic emergence of big god concepts through interaction with world religions held significant meaning for enabling culturally and regionally diverse individuals to participate in expansive trade networks. The Buddhisization of the Three Female Deities of Munakata can also be understood within this context.

4. Conclusion: Phased Transitions and Evolution of Personification in Concepts of *Kami*

The ancient Japanese concept of *kami* underwent a phased transition, shaped by new contexts that emerged in response to shifts in social group structures and the formation of new networks around the 5th and 10th centuries.

Among cognitive predispositions related to *Kami*, 1) “active agency detection and anthropomorphization of phenomena” can be confirmed in the Japanese archipelago by the 5th century, when the context of rule of All Under Heaven by the Great King was formed. However, in the early 8th century when the *Kojiki* and *Nihon Shoki* were compiled, not all *kami* had undergone such a process of anthropomorphization.

In the late 7th century, accompanying the compilation of the *Kojiki* and *Nihon Shoki* by the Ritsuryō state, faith in the *kami* was narrated and textualized in relation to the Great King (Emperor), and ritual systems and ritual sites were organized accordingly. Particularly from the 650s to 660s, the construction of “divine palaces” (*kami no miya*) modeled after the Great King’s residence (*miya*) at Ise Grand Shrine, Kashima Shrine, and Izumo, and the implementation of “ritual” ceremonies aligned with court ceremonies there (Saso, 2016), must have created images of *kami* in human form more definitively than before, making personification of *kami* more certain. Furthermore, in the Kasuga Festival ritual prayer text (*norito*) established in the second year of Jingo Keiun (768), offerings that had previously been called *heihaku* were classified into “divine treasures” (*shinpō*) owned by the *kami*, and beautiful cloth “divine

garments” (*gofuku*) worn by the *kami*, thus clarifying the image of *kami* as humans. This classification connects to the “divine property/treasures” and “vestments” detailed in the *Kōtai Jingū Gishikichō* (Saso, 2013). Moreover, in the *Kōtai Jingū Gishikichō*, the representation (*mikata*) of Tsukiyomi-no-Mikoto at the Tsukiyomi-no-miya Shrine is described as “the figure of a man on horseback, wearing purple robes and bearing a gilt sword at his waist.” This indicates that the *kami* was depicted as a mounted male god. The divine treasures include two golden great swords and one blue-haired clay horse, matching the appearance of the *kami*. The formation of *kami* images is often discussed in relation to Buddhist statuary. However, at this point, clear Buddhist influence cannot be recognized at Tsukiyomi-no-miya. Therefore, the background to the formation of the *kami* image of Tsukiyomi-no-mikoto at Tsukiyomi-no-miya may have been influenced by the evolution of *kami* personification in the 8th century.

The further development of *kami* personification in Japan by the 9th century likely laid the groundwork for subsequent changes in divine character between the 10th and 12th centuries; changes that adapted to new contexts such as the dissolution of ancient clan-based social structures and the integration into broader regional networks. These shifts also facilitated the syncretic fusion of Japanese *kami* with Buddhas, Bodhisattvas, and the Heavenly Beings of world Buddhism.

Bibliography

- Henrich, Joseph, 2020. *WEIRDest People in the World: How the West Became Psychologically Peculiar and Particularly Prosperous* (Farrar, Straus and Giroux).
- Mizoguchi, Koji 溝口孝司 2023. “Okinoshima saishi no kinō to hen’yō: Kodai higashi ajia no kokai-kōryū ni okeru saishi-shinkō eno apurōchi no kanten kara” 沖ノ島祭祀の機能と変容: 古代東アジアの航海・交流における祭祀・信仰へのアプローチの観点から, ‘Kami yadoru shima’ munakata-okinoshima to kanren isan gun tokubetsu kenkyū jigyō seika hōkoku sho 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業 成果報

- 告書 (‘Kami yadoru shima’ munakata-okinoshima to kanren isan gun hozon katsuyō kyōgikai 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会).
- Norenzayan, Ara, 2013. *Big Gods: How Religion Transformed Cooperation and Conflict* (Princeton University Press).
- Saso, Mamoru 笹生衛, 2012. *Nihon kodai no saishi kōkogaku* 日本古代の祭祀考古学 (Yoshikawa Kobunkan 吉川弘文館).
- Saso, Mamoru 笹生衛, 2013. “Shinpō no seiritsu: sosei no imi to haikai” 神宝の成立—組成の意味と背景— (Meiji Shōtoku Kinen Gakkai Kiyō 明治聖徳記念学会紀要, Reprint No. 50, Meiji Shōtoku Kinen Gakkai 明治聖徳記念学会).
- Saso, Mamoru 笹生衛, 2016. *Kami to shisha no kōkogaku: Kodai no matsuri to shinkō* 神と死者の考古学 古代のまつりと信仰 (Yoshikawa Kobunkan 吉川弘文館).
- Saso, Mamoru 笹生衛, 2023A. *Matsuri to kamigami no kodai* まつりと神々の古代 (Yoshikawa Kobunkan 吉川弘文館).
- Saso, Mamoru 笹生衛, 2023B. *Kodai kōtsuro to saishi no keikan: saishi-saigu no imi to kodai makki no henka o chūshin ni* 古代交通路と祭祀の景観—祭祀・祭具の意味と古代末期の変化を中心に—, Edited by Sasaki Ken’ichi 佐々木虔一, Saso Mamoru 笹生衛, and Kikuchi Teruo 菊地照夫, *Kodai no kōtsu to kamigami no keikan: minato, saka, michi* 古代の交通と神々の景観—港・坂・道— (Yagi Shoten 八木書店).
- Suzuki, Yasutami 鈴木靖民, Kaneko, Shūichi 金子修一, Tanaka, Fumio 田中史生, and Lee, Seiji 李成市 eds., 2017. *Nihon kodai kōryū shi nyūmon* 日本古代交流史入門 (Bensei Publishing 勉誠出版).
- Tanaka, Fumio 田中史生, 2013. “Wa no goō to rettō shihai” 倭五王と列島支配, *Iwanami koza nihon rekishi dai 1 kan genshi-kodai 1* 岩波講座 日本歴史 第1巻◆原始・古代1 (Iwanami Shoten 岩波書店).
- Tyler, Edward B., 1920. *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Language, Art, and Custom*, 6th ed. (Volumes 1 & 2) (John Murray).
- White, Claire, 2021. *An Introduction to the Cognitive Science of Religion: Connecting Evolution, Brain, Cognition, and Culture* (Routledge).
- Xygalatas, Dimitris, 2022. *RITUAL: How Seemingly Senseless Acts Make Life Worth Living* (Profile Books).

本誌のデータは、本遺産群のデジタル・アーカイブ
「MUNAKATA ARCHIVES」の「宗像研究文献」より
閲覧・ダウンロードできます。
<https://www.munakata-archives.asia/>

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群
第二期特別研究事業 第二回国際検討会

**信仰の歴史的変遷の世界的意義
報告書**

令和 8 (2026) 年 3 月 31 日発行

発行：「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局：福岡県人づくり・県民生活部文化振興課九州国立博物館・世界遺産室)
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園 7 番 7 号

ISBN978-4-9913533-4-5